

黒い蘭の咲く家

E・A・ポー「アッシュヤー家の没落」より

竹並 麻夕子

ローカル線を乗りついで、「岩蜘蛛」駅に降りたつたのは、もう西日のさす頃だった。深い山中を走ってきた列車は、ガタンと軋む音を立てて、小さな駅舎に滑り込んだ。それは、木々の陰にひっそりと埋もれるように佇んでいて、白いペンキがところどころ剥げている木造の建物だった。昔の分教場を思わせるレトロさもあるのかもしれないが、壁にかけられたすり切れた時刻表同様、パツとしない侘しさが感じられた。私は列車を降り、構内に入ったがそこにも人氣はなく、がらんとしたベンチがわびしく並んでいる。駅員の姿も見えず、どうやら無人駅らしかった。ただ、入り口の所に置かれた木箱が夕暮れのオレンジ色を浴びて、ほんのり光っている。そこに、ここまでの切符を投げこむと、私はそのまま、外へ出た。

バス停があるはずだ、と思ったのだが、そこに停まっていたのは、中型の白いセダンが一台きりだった。私の姿を認めたのか、その中から一人の男が出てきた。

「すまんが、あんた東京から来られた島田いう人かね？」

私はそうだと答える。近づいてきた男は五十歳くらいに見え、よく日焼けしていたが、底光りする目が敵意を感じさせると思っているのは、気のせいだろうか。鋭く光る目を私に注いだまま、彼は言った。

「奥村の御主人から頼まれたんでさあ。お迎えにあがるようにね」

どうやら、奥村がこの男を寄こしたらしい。それなら、願ってもないことだ。後部座席のドアが開けられ、私は乗りこんだ。駅前からは、舗装されていない道が一本伸びていて、その両側に雑貨屋、葉屋、パン屋といった店がポツポツ並んでいる。だが、相変わらず人の気配はない。そして、町の前方には、切り立った山が屏風のようにそびえていたが、その稜線は茜色に照り映えていた。

——暗くならないうちに、奥村の家へいかねば。私は少しあせりを感じた。

車は軽快なエンジン音を上げながら出発した。小さなメインストリートを通りぬけると、一面鄙びた山村の風景が広がった。田には、黄金色の稲が実り、傍らでは村人が作業している。田畑の畦道には、彼岸花やオミエナシの花が風に揺れ、今どき珍しい茅葺の農家さえ、姿をあらわした。集落は数十軒程度が寄り集まっているらしい。

「あなたは、奥村の家と何か御関係があるんですか？」

私は運転する男に訊ねた。

「いや、私はただの村の者ですわ。だが、私たちの村では、誰であれ、奥村さん所から用事を頼まれたら、お引き受けすると決まっております。なにしろ、奥村家は戦前までここいらの大地主でしたからな」

そんな昔の上下関係が今も生きているとは信じがたかったが、この時から置き忘れられたような山里ではありうることもかもしれない。

男はそのまま黙って運転を続け、やがて車は山道を縫うように走り始めた。道の端には、朽ちかけた道祖神や地蔵がポツンと置かれ、ススキやセイタカアワダチソウの群生が斜面を覆っている。だが、檜やくぬぎの密生する木立を傍らに見、黄昏の中を進む私のうちには、しだいに陰鬱な気持ち押し寄せてきた。なんとという淋しい山村であろう。奥村はこんな所で、何をしているのだろうか？ 私は彼の貴公子然とした青白い顔を思い浮かべた。土俗的匂いの色濃く残る、僻地なんて彼には不似合いなはずではないか。

この風景には、どこか原始的な、現代とは異質なよそよそしさが感じられた。以前、英国へ旅行したとき、西部をドライブしていて、通りかかったダートムアの荒野を思い出させもする。シャーロック・ホームズの冒険譚『バスカヴィル家の犬』の舞台ともなった、この場所は先史時代の遺跡や沼沢地が混在していて、どこかこの世ならぬ所のようにも見えた。目に入る風景はまったく違ったものだとしても、この二つの土地は似通ったものがある。

キツ、と音をたて、車は羊草が藻のように浮かぶ沼のそばにとまった。

「着きましたさあ」

だが、目の前にあるのは鬱蒼とした雑木林だけだ。

「こんなところ、何もないじゃないか」

「だから、その林がもう、奥村家の敷地なんで」

男の説明に半信半疑ながら、私はポストンバッグを持って車から降りた。樫や唐松のがっしりした樹木の間、確かに遊歩道らしき砂利道が見える。その方に足を運ぼうと歩を進めたとたん、私を乗せてきた車はもう走り出してしまった。

「やれやれ」

私は一人ごちたが、その途端肌がぞわりと粟立つような不快さを感じた。どろりとした薄黒い沼からたちのぼる瘴気や、木々が放つ精気——それらがぬらぬらと皮膚にまといついてくる。まるで体がゼリーに覆われたような、何か得体の知れない生き物の手で撫でまわされているような薄気味悪さだ。私はもう少しで叫びだしそうになった。この場所は変だ。樹木の根元の土壌にも、苔の胞子や粘菌やらがりついていて、一種の結界をつくっているんじゃないか。

沼のそばで、私を襲ったのはそんな気違いじみた想像だった。

——気のせいさ。長旅で疲れているから、おかしいことを考えてしまうんだ。

私は息を吸い込むと、雑木林の中に入ってしまった。樹木の間には、きちんと玉砂利で敷きつめられた歩道があつて、野鳥の囀りも聞こえてくる。

そのまま砂利道を歩いていくと、思いもかけぬほど立派な日本家屋があらわれた。黒ずんだ木造の壁は、幾世代もの時の堆積を物語り、美しい木目を見せる玄関の引き戸や凝った意匠の門灯は、家の格式の高さを表していた。

玄関のそばには、金糸梅の茂みがあり、それに隠れるように蘭が密生している。だが、それは蘭だったろうか？ 花卉は小さく、色は影のように濃い。庭園全体が暮色の中に沈んでいるのにひきかえ、不思議なほどの生気を放っている。

この花を見た時、私はまたさきほどの不快感がよみがえるのを感じたが、かまわず呼び鈴を押した。硝子の向こうで人の動く気配があり、戸ががらりと開いた。小柄な老婆が、こちらをジッと見すえている。白い髪を頭のとっぺんで、くるりとまとめ上げていたが、まるで、貝殻をかぶっているようだった。

「突然おじやまして、すみません。奥村君の友人の島田という者ですが」

「ああ、島田さんですね。坊ちやまから御案内するよう、申しつかっております。どうぞ、中へ」

老婆に言われるまま、中へ入った私は、その黴臭い空気に思わずたじろいだ。玄関ホルの壁にかけられた鹿の頭の剝製、ホール横に残されている昔の電話室——黴臭さはあらゆるもののうちに、麟粉のように舞い降りていた。

地方の歴史ある旧家らしく、渡り廊下の飾り棚には、骨董らしい大皿や精巧な細工のなされた香炉が置かれていた。だが、それらからは、最初持っていたはずの美が消えてしまっていた。ここではじめて私は気づいたのだが、この屋敷は外から見ると純和風なのに、内部はすっかり洋館風にしつらえられている。床は寄木張りだったし、ホールから廊下へ続く部分にはアーチがかかっている。

そして、これはどうした事だろう。窓という窓には、黒いカーテンが垂れ下がりに、全体に薄暗い。それを補うかのように、照明が灯されていたが、まるでガス灯のような弱々しさだ。

「こちらでございます」

老婆は先に立って、すべるように歩きはじめた。まるで、水面を横切っていくかのような、体重を感じさせない歩き方だった。さきほど玄関で会った時、渋紙色の皮膚に皺が幾重にも折り畳まれ、かなりの高齢に見えたが、案外若いのもかもしれない。

薄暗い洞窟のような廊下をL字型に折れると、奥まったところにポツンとドアがある。

老婆は、その扉をノックした。

「おはいり」

低い、かすれた声が聞こえた。確かに奥村の声だ。老婆はぐいっと扉を開け、体を脇にどかせると、入るように私をうながした。

私はためらいながら、部屋に足を踏み入れたが、次の瞬間、その異様さに息を呑んだ。十二畳はあろうかという広い部屋は、天井から床まで黒い布で覆われていたのである。書物があちこち散乱し、ベッドは乱れたシーツが風紋のような模様を描きだしている。そして、奥村は机にもたれかかるような格好で椅子に座っていた。よれよれのパジャマから瘦せたすねがのぞき、髪は鳥の巣のようにモジャモジャと乱れている。頬の肉はげっそりと落ち、眼だけがギラギラと輝いているのが、机の上のライトに照らされてはつきりとわかった。

「島田か。遠いところをよく来てくれた」

奥村は、こわばった笑みを浮かべたが立ち上がりとはしなかった。

「ああ、ここまで来るのに大分かった。だが、これはどうしたことだい？ 君とずっと連

絡が取れないから、下宿先に訊ねたところ、引き払ったという。驚いて、大学に問い合わせたら、突然辞職願いをだして、田舎へ帰ったというじゃないか。電話したって、君は出ようともしない。だから、今日何うと一方的に手紙に書いて、やってきたわけさ」

私は、言ってからつけくわえた。

「君は驚くほどやつれている。体の調子が良くないのかい？」

ぶしつけな質問にも、彼はニヤリとただけだった。そして、はじめて気づいたかのよう、部屋の隅にあるソファを、手で指し示した。私はそのソファに座った。刺繍のほどこされた上等なものらしかったが、すっかりスプリングがゆるんでしまっている。そして、先刻、部屋まで案内してくれた老婆は、いつの間にか姿が見えなくなっていた。

「うん、確かに調子は良くない。僕はもともと神経が脆弱にできている。だが、その神経がズタズタに引き裂かれる事態が勃発したから、郷里へ逃げ帰ったというわけさ」

「そんな説明じゃ、わからないな」

私は少しいらいらしながら言った。

「君は優秀な医学者だ。遺伝病学の分野で、素晴らしい研究成果を幾つも発表してきたじゃないか。ハンチントン舞蹈病や血友病についてね。だが、僕がここに来たのは君の才能を惜しんでだけじゃない。大学時代からの友人として、君のことが心配なんだ」

「それは、どうもありがとう」

奥村は片手をあげてみたが、その手がひどく震えているのに私は気づいた。彼の蒼白な顔は、三十二歳という若さそのままに、まだ青年の名残をとどめていたが、生命力のエキスをしぼりだしてしまった後のように見えた。

奥村と私は医学部の学生時代から仲が良かった。といっても、最初のうち、一方的に私が声をかけていったのだ。彼の高貴な外見や、飛び抜けた知性に惹きつけられたのだが、人嫌いらしくあいさつされても返事さえしないことがあった。だが、ある日授業を受けていた時、隣りに座っていた奥村のノートに私の目がとまった。彼は、教授の説明を書き記す以外に、骸骨とか墓地とか女の裸体とかいった絵を余白に書いていた。思わず、私が覗きこむと、それに気づいた奥村がにやりと笑いかけた。そうしたことをきっかけに私たちは親しくなっていた。だが、友人つきあいをするようになって、彼には謎めいたところがあったと思う。私以外の級友には口をきこうともしなかったし、踏み込んだ質問をされるのを嫌がった。

黙々と独自の研究にふけっている彼の姿が、大学の片隅で見られたが、その興味は遺伝子の損傷によって引き起こされる難病に向けられているようだった。卒業後、彼は研究室に残り、私は開業医の道を選んだ。だが、彼が臨床医にならなかったのは、人間の生身の肉体に関心がなかったからだという事を、私は疑っていない。

何年もつきあってきた私でさえ、奥村のプライベートな事はほとんど知らなかった。信州の山深い地方で生まれ育った事、先祖は大地主だったらしい事、両親はすでに亡くなっている事——知りえたのは、それぐらいだった。

「神経の病気というのはだね」

奥村が重い口を開いた。

「感覚が異常に鋭敏になっているんだ。ちょっとした物音が、鼓膜を震わすほどのショックを与えるし、何か食べたとしても、ほとんどのものは、舌への刺激が強くて食べられないんだ。服にしても、皮膚にこたえるものは駄目だから、こんな格好でいる」

彼はパジャマを指し示した。

「眼だって、ちよっとした光線がさしこむだけで痛くなる」

「……それで、こんなに家を閉めきっているのかい？」

「いや、それにはもっと重大な理由があるんだがね」

奥村は、そこでうつすらと微笑んだ。その微笑には、こちらの背筋をひんやりとさせるようなものがあつた。

「それだけじゃないんだ。僕の鋭くなった五感は、細胞やら微生物やバクテリアの運動さえ感じとってしまうのだ」

「そんな馬鹿な」

「たとえば、ここにこうして座っているとするとこの家の壁に巣食っている微生物やら、庭の苔や土のバクテリアたちが蠢いているのを肌で感じる。無数の小さな虫が全身をはいまわっているような、いやあな気分さ……。だが、恐ろしい事に知覚を持たないはずの、それらの微小生物が意志を持っているのを感じるんだ。僕とこの家の息の根をとめてやろうという、ね」

「奥村……」

私は次の言葉がでなかった。

「僕の生命はきつと、そう長くない。自分でわかるんだ」

彼はそこで口を切り、私たちの間に沈黙が落ちた。黒いカーテンにさえぎられてわからないが、外はもう夜なのだろうか。光を遮断した部屋にあっては、周囲の様子など皆目わからない。ただ、雑木林の木々の梢を渡るらしい、風の音だけが聞こえた。

だいぶ、ひどい神経症だな。私は思った。微生物やら苔の孢子が意志を持って、自分を取り殺そうとしているだって？ どうして、そんな奇妙な考えを抱くようになったのだろう？ この暗幕に閉ざされた室内で、背を丸め座っている奥村の姿は、水族館の水槽の中の深海魚のように見えた。机のライトが顔を黄色く照らしだしているのも、照明を浴びた水の中を泳ぐ魚を連想させる。彼の妄想を理解できないにせよ、こんなところに置いておいてはいけない。私は考えを口に出すことにした。

「奥村、確かに君はひどく苦しんでいる。だが、こういう陰気臭い場所にいちや、駄目だよ。考えが悲観的になるばかりだ」

「君が理解してくれるとは、思わなかったよ」

奥村はあきらめたように言うのと、続けた。

「島田、君もせっかくな来てくれたんだ。こんな辺鄙なところだが、良かったら何日か逗留してくれ。部屋の用意は彦乃にさせてある」

玄関で私を出迎えた老婆は、彦乃という名らしい。

「ああ」

私がそう答えた時、部屋の扉がノックされた。

「坊ちやま、島田さん。御夕飯の用意ができております」

彦乃という老婆が、顔をのぞかせた。

「ああ、今行く」

私たちは立ちあがって、部屋をでた。「夕食もこの婆さんがつくったのかな？」と私は前をゆく彦乃の後姿を見ながら思った。他に使用人はいないようだし、この広い家に奥村は、この老女と二人きりで暮らしているのだろうか？

さきほどの暗い廊下を左手に曲がると、両開きの扉が見え、その奥は寄木張りの床が敷きつめられた食堂だった。食堂前には、マホガニーらしい重厚な飾り台が置かれ、ところどころ花の紋様が浮き彫りされていた。その上には、やはり時代ものらしい青銅のランプがあつたが、眼をとめた私は、思わず息を吸いこんだ。ランプの傘の表面には、茶褐色の大きな蛾が羽を広げていたのである。羽には、丸い模様が左右対称につき、まるで二つの目玉に凝視されているように思えた。

食堂の中央には黒褐色のテーブルがでんと置かれてあつた。その上に並べられていたのは、山菜のお浸しに、コンソメスープ、ハヤシライス、薬草を煎じたらしい変わった匂いのするお茶、という奇妙なメニューだった。そして、料理はなぜか三人分用意されていた。

「誰か、僕の外に、お客さんでもあるのかい？」

私が聞くと、奥村は首をふった。

「そういう訳じゃない……まあ、そのうち来るさ」

意味するところがわからなかったが、それ以上質問するのをあきらめ、私はテーブルについた。

天井から吊り下がった丸い笠のような照明は外の部屋より幾分明るかったし、薬草茶は口に含むと素晴らしい芳香がしたが、沈鬱な物悲しさがあたりに漂っていた。空気は重く、深い海底に沈んでしまったかのようなうだ。

私たちは、黙々と料理を口に運んだ。食器やスプーンが触れ合うかすかな音以外、何の物音も聞こえない。奥村の体調をおもんばかって、ごく薄味に調理されていたものの、それでも刺激が強いらしく彼は、あまり口をつけようとしなかった。食事があらかた終わろう、という頃突然、食堂の扉が開く音がした。

反射的に振り返ると、そこに立っていたのは思いがけず美しい娘だった。白いブラウスに紺色のプリーツスカートをはき、髪は肩の上で豊かに波打っている。ほの暗い空間にほっそりと立ちつくす様は、精霊のような非現実的なものをたたえていた。

私は一瞬、彼女に見とれたが、

「すみません、お兄さん。遅れました」

娘が口を聞いたのに、はっと我にかえた。そういえば、奥村には年の離れた妹がいると聞いたこともあつたっけ。

娘は私の隣に腰をおろした。その横顔を見て、私は彼女が奥村とそっくりなことに驚いた。よくとおった鼻筋と、刺すような光を放つ眼、そして蒼白な皮膚。

「島田、紹介するよ。妹の陽子だ」

奥村は、妹の方に手をふった。

「島田さんですね。兄からお噂はしよっちゅううかがっております」

陽子という娘は、こちらに向かつて微笑んだ。脱色したような肌をしていたが、眼の下に黒々とした隈があるのが、はっきり見える。

「こんな人里離れた所まで来てくださる、お客様など滅多にいません。だから兄と私は、ごく淋しい生活を送っているんです」

彼女はそう言って、葉草茶を口に運んだ。

「だから、島田さんが遠路はるばる来てくださったのは、本当にうれしいことですよ」
私はちよつと、首をかしげた。奥村は友人の来訪を喜んでいるだろうか？ 一方的に押しかけて来た私を迷惑がり、腹をたてているのではないか？

こつそり、友人の表情をうかがったが、そこには平靜な静けさしか浮かんでいない。「確かに、若い女性には、もつとにぎやかな所の方がふさわしいかもしれませぬ」

私は陽子の方を向いた。

「陽子さんは、都会に出てみようとか思いになられないんですか？」

一瞬、ぎごちない沈黙が降りた。しんとした静寂の中、細く光る針が床に落ちた時のような、不穏な緊張さえ感じられる。

「私、訳あって、ここから離れることはできませんの」

少しして、陽子が小さな声で言った。

「それでは、毎日どんな風に過ごされているんですか？」

「そうですね……。ほとんど家から出ないで、籠もってますけど。海外のミステリ小説を読んだり、植物を取ってきてもらって、それで絵を描いたりしてます。これで、結構時間をつぶすことができるんですよ」

「それは、素敵じゃないですか。僕も陽子さんが描いたという絵を見てみたいですよ」

「いえ、お目にかけるようなものじゃありませんわ」

会話はあまりはずまなかった。私と奥村が食事を終え、彦乃が「デザートをお持ちします」とやって来た時、陽子はさっと立ちあがった。

「じゃあ、これで失礼しますわ。お食事はもういりません……あまり食欲がないの」

そういうや、木立から飛び移る鳥のようにあつという間に食堂から出ていってしまった。

「妹さんは、大丈夫なのかな？」

私は、陽子の出ていった扉を見ながら聞いた。

「放っておけばいい。いつものことさ」

奥村はそつげなく言っただけだった。

やがて、ぬるいコーヒーと最中饅頭という、これも奇妙なデザートが運ばれてきた。

「君は、この家がカーテンで閉めきつていないことを非難したね」

奥村は、コーヒーカップを手にとりながら言った。神経の緊張を示すように、その手元は激しく震え、コーヒーがこぼれやしないかと私ははらはらしながら見守っていた。

「でも、今はもう夜だ。だから、おおっぴらに開けることができる」

いきなり彼は立ち上がると、食堂のカーテンをぱつと引いた。正方形の硝子を格子形に嵌めこんだ窓の向こうには、深い夜が広がっている。群青の夜空の下、山々と樹木が黒々としたシルエットを浮かび上がらせている。皓皓と輝く満月が、雑木林の上の空にはりついているのが、芝居じみた鮮やかさだった。

「いつも、こんな風に夜しかカーテンを開けないのかい？」

私は聞いたが、こうした日光を恐れる様子は、少なからず異常に感じられた。

「妹がね、病気なのだ」

奥村は低い声で言った。それはささやいているといっても良いほど、かすかな声だった。

「島田、君も医者だ。だから、当然『色素乾皮症』という病名は知っているだろう？」

色素乾皮症！ 私はその名を口の中でつぶやいた。Xeroderma Pigmentosumが正式名称で、俗にXPと呼ばれている。皮膚や眼や神経系が冒されるのが特徴で、わずかに日光にあたっただけで、水疱や紅班が生じ、悪性腫瘍化する。皮膚ガンの発症リスクは健常者と比べて一万倍超、黒色腫の発症リスクは二千倍超、という異常な数値がデータから確認されている難病だ。

XPは、常染色体劣性で遺伝し、紫外線にあたった際、DNAが修復されないことが原因だとされる。そして……。私はためらいながら聞いた。

「妹さんには、難聴や認知障害などの神経症状は出ていないようだが？」

奥村は暗い眼をしたままうなずいた。

「妹は、そのタイプではないんだ。だが、君も知っているだろう？ 色素乾皮症の患者は短命だと」

重苦しい沈黙があたりに落ちた。私は何を言っているのかわからず、下を向いていたが思いきって友人の顔を見た。だが、そのとたんギョツとして、その顔を凝視した。これはどうしたことだろう。奥村はニヤニヤ笑っているのだ。血走った眼に、薄ら笑いを浮かべているさまは、何ともいえず気味悪いものがあつた。

「この奥村の家はもともと、そういう血筋なんだ」

彼は、相変わらずささやくように続けた。

「何百年も続いてきた家柄で、ここいら一帯に広大な土地を持っていた。村の家の大多数はもとをたどれば、うちの小作農だった。だが、それだけ由緒ある家でありながら、分家はないし、できたとしても長続きしない。奥村の人間は長生きしないし、奇妙な病気にとりつかれるのさ。僕や妹のようにね」

暗い林のどこかで、「ホウーツ、ホウーツ」と鼻が啼いている。

「村の人間は、会えば丁寧に接してくれるが、実のところ、この家を気味悪がってる。訳のわからない病原菌を扱うように、遠巻きにして見ているのだ」

「君の考えすぎじゃないかい？」

私は言ったが、自分でも気休めにしか聞こえなかった。

「そうかな。でも、今日は僕もいつもより体調がいいんだ。食事もとれたくらいだしね。これも、君が遠くから来てくれたおかげだ。うれしいよ」

奥村は、わたしに手をさしだした。冷たく、汗ばんだ手だった。

例の老婆、彦乃が私を寝室に案内してくれた。この家は全体として口の形をしているらしい。黒いカーテンで見えないが、建物の中央には中庭でもあるのだろうか？

廊下を右に曲がると、ドアが幾つもあったが、彦乃は左から数えて二番目のノブを開けた。

「こちらですよ」

黴臭い部屋には、木製の寝台とサイドテーブルがあるきりだった。ドアのそばには、私がつけてきたポストンバッグが、いつの間にか置かれている。

「浴室は、廊下の端にありますから」

それだけいうと、彼女は立ち去った。

私はホッと息をついて、ベッドの上に腰を下ろした。疲れがどっと肩にのしかかってくる——随分異様なところへやってきたものだ。「岩蜘蛛」という気味の悪い名前の駅で降りてから、ここに辿り着くまでを私は思い返した。この屋敷を見た時に奇妙な結界が張られているように感じたこと……考えてみると、微小生物や、有毒な気体の悪意という奥村の言葉は妄想とばかりはいえないのかもしれない。友人のやつれきった顔や、震える手。そして、不治の病に冒された彼の妹。それらが私の頭の中で万華鏡のピースのように散りばめられ、拡散した。

——奥村を説得するどころか、僕の頭がどうかなりそうだった。

ベッドに横になり、枕に頭をつけると、そのまま眠りこんでしまいそうだった。のろのろと腕をのぼし、そこにはめた時計を見ると、すでに夜の十時を過ぎている。はやく、湯につかって、眠ろう。私は着替えを腕にかかえると、廊下に出た。

彦乃の言っていた浴室はすぐわかった。廊下の奥の引き戸を開けると、湯気の匂いがたちこめている。電燈のスイッチをつけようとしたものの、なぜか見つからず、やむなく暗い脱衣所で服を脱いだ。

——ピチャン。

どこかで、水音がしたようだった。誰かいるのだろうか？ 耳をすませたが、それきり音は聞こえてこない。私は頭をひとふりすると、浴室の方に足を踏み出した。

だが、そろそろと硝子戸を開けかけたと思ったら、そのまま動けなくなってしまった。不思議にも妖しい光景が、眼前に繰り広げられていたのだから。

広い浴室は、石のタイルが張られ、外に面した窓は中央の部分がステンドグラスになっていた。そして、赤やオレンジの光が、そこからさしこんでいる。だが、私を驚かせたのは、そんなことではない。浴室のまんなかにある大きな浴槽——その中で、二人の男女がかたく抱き合っていたのである。

ステンドグラスの光は、浴槽の水面にもキラキラと降りそそいでいる。明るい月光のせいで、私には浴室内の様子がはっきりとわかった。青白い腕を女の背にのぼし、かたく目をつぶった男——それは、私の友人だった。そして、同じように目を閉じたままの女は彼の妹に違いなかった。月のほの白い光やステンドグラスの色が、彼らの体に奇妙な縞をつくりだし、さざなみのように揺れるのが見えた。

それから、どうやって部屋まで戻ってきたのか記憶がない。私は寝台に横になったまま、今見たばかりの、世にありうべくもない光景について思いをめぐらせていた。浴槽に身をひたしたまま、からみあう木のように抱き合っていた兄妹。だが、そこには「近親相姦」という言葉がもたらす忌わしさや淫靡さなどなく、何かこう悲劇的な美しさを感じられた。

前夜の衝撃的なシーンが瞼の裏にちらついて、疲れているにもかかわらず、ほとんど一睡もできないままだった。夜明けの曙光が部屋を照らした時、私は起きあがった。

廊下に出ると、ひんやりとした冷気が足元からのびよってくる。それをふりきるようにして、私は窓辺に近寄ると、黒いカーテンをそっとめくってみた。

四角く区切られた中庭が見えた。いくつか置かれた岩のまわりに植物が、密生している。

私は、それが昨日玄關脇で見つけた花であることに気づいた。黒みがかかった紫の花弁は、

やや小さめで、その葉は暗い緑をおびている。ひっそりと神秘的だったが、庭いっぱいに群生している様子は気味悪さも感じさせる。

「黒蘭だよ」

突然、そばでそんな声がして、私は驚いて振り返った。背後に立っていたのは、奥村だった。

「ずいぶん早いんだな。眠れなかったのかい？」

何と答えていいのかわからず、口ごもっていると言った。

「この黒い蘭はだね、亜種とか希少種とかいう訳じゃないんだが、それでも通常はなかなか見られないものさ。だから、なかば伝説化していて、ミステリアスなイメージをかきたてるらしい。僕も山の中で偶然見つけたんだが、それを幾株か植えたのが、こんな風に繁殖したわけだ」

「黒い蘭というのは、聞いたことあるよ」

「ちょっとみると、なかなか風情のある花だろ。だが、こんなに屋敷じゅうはびこっているのを見たら、恐ろしくなってきた。菌類やバクテリアと同じ悪意を、僕に抱いているはずだとね」

「それが、神経の病気さ」

私は答えたものの、心ではまったく別のことを考えていた。黒い蘭——この現実離れた花は、美しい兄妹の姿に重なった。

暁の庭の中で、岩も黒い花もまだ眠りにについているようだった。私たちは黙って、それらを眺めていたが、ふいに奥村がこちらを向いた。

「どうだい？ 僕の部屋へ行って、お茶でも飲もうじゃないか？」

かすかな微笑が浮かんでいる。気のせいかな、昨夜より生気がよみがえっているようだ。

彼の部屋は、床にストローブがつけられ、赤い炎がちろちろと燃えていた。

「まだ、秋でも山は寒い。僕には、ちょっととした冷気も、氷のように冷たく感じられるんだ」

彼はそう言いながら、例の薬草茶をさしだした。

「この薬草茶はだね、この土地独自の植物をすりつぶして作っているんだが、内臓や皮膚をあたたためてくれるものさ。僕らも重宝している」

高度な医学をおさめたはずの、奥村の言葉としては奇妙に思えたが、この灰緑色の液体は確かにききめがありそうな気がする。私は、一気に飲みほした。それから話した事は、医学知識に関する事で、私はこの友人が研究への情熱を失っていないことを感じて、すっかりうれしくなった。

「遺伝子治療は確かに有効だろう。だが、ゲノムの解析はすっかり終わった訳ではない。もし、解析がすべて完了して、我々が人の遺伝子を自由に操作できるようになったとしても、また新しい難病がでてくるはずさ。インフルエンザがウイルスの型を次々変えて生きのびようとするようにね。自然はそうしたものだ」

彼はなお話し続けようとしたが、その時、

「ぎゃあっ」

突然、どこかで恐ろしい絶叫が聞こえた。私は思わず、腰を浮かせた。この上ない恐怖、そして怒りをも感じさせる声——。屋敷のどこかで、何かが起こっている。悲鳴の余波

が空気を震わせ、私に来たるべき悲劇を告げていた。

「奥村……今のは？」

彼は、こちらを見ていたが、形容のしようのない奇妙な表情を浮かべていた。

「夜中のうちに、妹の部屋にしのびこんで、カーテンを開いておいたんだ」

「……」

「朝日が、眠っている妹を照らした時、何が起きただろう？ 僕には、妹の恐怖が手にとるようにわかる」

私の耳は、廊下を。パタ。パタと走ってくる足音をとらえていた。あれは――。

「なぜ、そんなことをしたんだ？」

「自分でもわからない。多分、もういいかげん嫌になったんだろう。暗く閉めきった家に息をひそめていることにも、ちょっととした刺激にもびくびくしていることがさ」

足音はいっそう大きくなり、次の瞬間、部屋の扉が乱暴に開けられた。疾風のように駆けこんできたのは、陽子だった。

「お兄さん」

彼女は叫ぶと、椅子に座った奥村のもとにかけよった。だが、その顔を見た私は一瞬目をそらした。陽子の顔には大きな水疱がいくつもでき、肌は羊皮紙のようにながさがさからびていたのだ。それは、ひびわれた仮面を私に連想させた。

陽子は、奥村の膝に顔をうめたまま、動こうとしなかった。彼は、その髪をしばらく撫でさすっていたが、やがて私の方を向いた。

「この奥村の家も、僕の代で終りだね。その方がいいのかもしれない」

私は身動きもできず、黙って立ちつくしていた。ストーブの炎がジジと音をたてて燃えるのが、いやに大きく響いた。

翌日、私は荷物をまとめると、奥村家を後にした。玄関の戸を閉めると、石畳の横に黒い蘭が、ひっそりとうずくまっている。射しこむ日光を吸いこんでしまうような、黒い花弁。それが、何十と、風に揺れているさまは、この家を取りまく墓標のようだった。

(了)